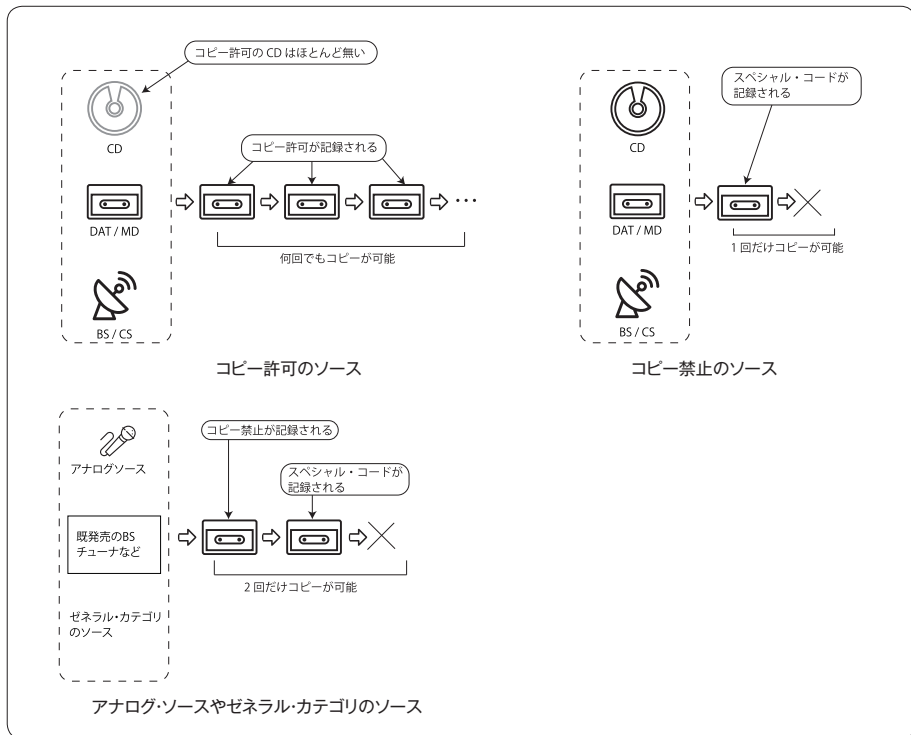


▼ SCMS によるデジタルコピーの様子



これらの制御はDATに組み込まれたマイクロプロセッサ(MPU)によって制御されている。まさにデジタル機器ならではの手法と言える。このような著作権保護技術を「フラグ検出型」と呼ぶ。

DATは結局、使い勝手の悪さや価格がこなれなかったことなどから大きく普及することはなく、1992年に登場した、光学ディスクで使い勝手の良い、ミニディスク(MD)が録音再生機器の主流となった。

MDのデータ構成はリンク・セクタ、サブデータ、圧縮された音楽データ(左チャネルと右チャネルが交互)で構成される。ただし、再生専用ではリンク・セクタがサブデータ・セクタになっており、録音用ディスクに完全に複写することはできないようになっている。また、SCMSについてはDATと同様の手法が用いられている。MDもまたDATがMDと世代交代したように、ソリッドオーディオプレーヤーへと交代してゆくことになる。